

## S・D・ワルシュ「目的論、アリストテレス的徳、正しさ」解説

荻原 理

この論文でワルシュは、徳倫理学に対してしばしばなされる二つの反論に応答する。それらの反論はいずれも、徳倫理学の主張が何かについての誤解に基づいているとの指摘から彼は始める。

ワルシュによれば、徳倫理学の主張は次のものだとしばしば誤解されてきた。すなわち、〈ある状況に置かれた時、なすべき（なすのが正しい）こと〉とは、〈完全に有徳な人がもしその状況に置かれたならばなすであろうこと〉だ、というものだ。

徳倫理学の主張についてのこの誤解に基づき、徳倫理学に対して次の二つの反論がしばしば投げかけられてきた。

第一に、徳倫理学はある場合については、〈この状況に置かれた時、どうすべきか〉を教えてくれない、という反論である。完全に有徳ではない人が、完全に有徳ではないからこそ——つまり、あるよからぬことをしてしまったからこそ——置かれてしまう状況がある。例えば、誰かに嘘をついてしまい、何か償いをすべきだ、というような。このような状況でどうすべきか、徳倫理学は教えてくれない。というのは、徳倫理学は“個々の状況でどうすべきかを知るには、完全に有徳な人がその状況に置かれたならばどうするだろうかを考えよ”と説くが、今問題の、〈人が完全に有徳ではないからこそ置かれてしまう状況〉に、完全に有徳な人が置かれることは、当然、あり得ず、したがってこの場合、“完全に有徳な人がその状況に置かれたならばどうするだろうか”を考えようがないからだ。

徳倫理学に対して投げかけられる第二の反論はジョンソンによるもので、徳倫理学の立場を採ると、“人はより善い人になろうと努めるべきだ”と言えなくなってしまい、というものだ。完全に有徳な人は、これ以上道徳的に発達する余地がなく、したがってより善き人になろうと努めることもないからだ。

徳倫理学に対するこれら二つの反論に応答する前に先ずワルシュは、徳倫理学の主張についての上記の誤解（「・・・完全に有徳な人が・・・」という主張だとする誤解）を退ける。ワルシュによれば、徳倫理学の主張は正しくは次のものだ。すなわち、〈ある状況に置かれた時、なすべきこと〉とは、〈ある有徳な人 (a virtuous person) がもしその状況に置かれたならばなすであろうこと〉である、というものだ。

そしてワルシュは述べる。完全に有徳な人（道徳上の熟達者）がなすことと、ある有徳な人（例えば、道徳上の初心者）がなすことは、ともに「有徳なこと」と記述でき、記述のこのレベルではそれらは“同じ”だと言ってよい。もちろん、だからといって道徳上の熟達者と初心者がすっかり同じことをするということにはならない。このように、記述のレベルに注意することが肝心なのだ、と。

これらの点を踏まえてワルシュは、徳倫理学に対する二つの反論に応答する。

第一の反論に対して、彼は二つの点を述べる。第一に、たとえ記述のある仕方によれば、完全に有徳な人はけっして置かれることのない状況に、誰かが置かれるとしても、その人が置かれる状況を、完全に有徳な人も置かれ得るような状況として記述し直すことができる。こうして、一見徳倫理学では対処できないように思われる場合にも対処できるようになる。ワルシュは次の例を挙げる。

ジョンはギャング稼業に手を染めることでじぶんと友人を危険な状況にさらす。ジョンは“なすのが正しいこと〔なすべきこと〕は、完全に有徳な人がなすであろうことだ”と信じ、“ぼくが正しいことをするのは不可能だ。完全に有徳な人はギャング稼業なんかには手を染めたりしないはずだから”と考えるにいたる。だが、ジョンの、より完全に有徳な友人の一人、ジャネットは、〈完全な徳〉の説明によってさえ、ジョンが正しいことをするのは可能だと気付く。ジャネットはジョンに、彼は彼の行為を違ったやりかたで記述できると言う。あなたの行為は、「ギャング稼業から足を洗う」とではなく、「じぶん自身および他人の幸福をおびやかす危険な状況から抜け出す」と記述できるのよ、と。完全に有徳な人でさえ、じぶんには何の落ち度もないのに、危険な状況にはまりこみ、じぶんと友人をそこから脱出させなければならなくなるかもしれない。完全に有徳な人でさえ、ギャングのいざこざで何人かの友人ともども人質になり、街を去り身を隠さなければならなくなるかもしれない、とジャネットはジョンに言う。それを聞いてジョンは気が楽になり、友人とともに街を去り身を隠す。

ところで、適切な記述の選択というこの論点との関連でワルシュは、規範倫理学上の三大流派である義務論、功利主義、徳倫理学の間の論争についても重要な洞察を示す。それらの流派はそれぞれ、「行為者性を尊重せよ」、「功利性を最大化せよ」、「有徳たれ」という単純な中心的主張を掲げている。そして人はそれらの主張に不都合だと思われる事例を持ってきて反論を企てることができる。しかしワルシュは、“ある一般的主張をある個別事例に適用するさい、その個別事例の適切な記述を見出すことで、その事例についての理に適った主張となる場合もあれば、事例の記述が不適切であるために、主張が理にそぐわないものとなってしまう場合もある”という事情に注意する。義務論、功利主義、徳倫理学の中心的主張が個別事例にどう適用されるべきかは、当の倫理学理論全体に対する「感受性」を働かせながら判断すべきだというのだ。

話を戻せば、徳倫理学に対する第一の反論に答えての第二の論点としてワルシュは言う。完全に有徳な人が実際にはけっして置かれまいであろう状況についても、完全に有徳な人が、「もしじぶんがその状況に置かれたとしたら、こうするだろう」と想定できるだろう、と。

徳倫理学への第二の反論（道徳的発達を目指すことの正しさを語る余地についての）に対してもワルシュは、徳倫理学の主張の正しい定式化は「・・・完全に有徳な人が・・・」ではなく「・・・ある有徳な人が・・・」であると指摘することによって応えることができる。ある有徳な人は、さらに有徳になろうと努めるだろう。だから、徳倫理学の立場に立っても、より善い人になろうとすることの正しさについて語るができるのだ。

ワルシュはさらに次のように論じる。すなわち、まさに道徳的発達のために、徳（さしあたりは不完全な）が必要なのだと。たとえば、考え深さや自己知の徳（ある程度の）をもつ人が、みずからの道徳的視野の狭さに気づき、これをみずから拡張しようとする、ということがありうる、と。ワルシュの挙げる例を見よう。

カイヤという名の学部生がおり、彼女は私の議論の目的のために、正しい行為についてのアリストテレス的〔徳倫理的〕説明における「ある有徳な人」を代表するとせよ。カイヤは不完全な人で、彼女のコミュニティの成員として社会的、情緒的、知的に発達している。彼女は大学で、他人との日々のやりとりにおける彼女の親切で友好的な性向を発達させる。彼女の諸徳は不完全だ。なぜならそれら

はだいたいのところ、彼女が大学や家庭に見出す快適な中流階級の生活に合わせてしつらえられているからだ。彼女が毎日顔を合わせる人々との快適な大学的環境にあるとき彼女は親切で、考え深く、友好的だ。だがキャンパスを離れると彼女は見知らぬ人に対して冷淡で、猜疑心を抱き、不快をおぼえたりする。だが彼女の一般に考え深い性質のために、彼女はキャンパスにいる時といない時で人々にたいするじぶんの態度が別物であることを認め、「私はじぶんが親切な人間だと思っていたけれど、本当はまだまだなんだわ」と思う。

カイヤはじぶんの比較的ローカルに発達した特性——すなわち中流階級の大学生活に限定されたところで発達した特性——を他の状況へと拡張することによって、じぶんの誤りをただそうとする。彼女は夏休み、社会正義のためのグループが主催する夏の奉仕活動旅行に参加し、今まで馴染みのなかったたぐいの環境のうちで暮すよりヴァラエティに富んだ人たちに対してじぶんの親切心を広げること学ぶ。大学に戻り、彼女はその地域に暮らすさまざまなバックグラウンドの人たちと一緒に活動することで、みずからを発達させ続ける。やがて彼女の親切心や考え深さは地域に縛られた偏狭なものから世界市民的なものに変わる。

カイヤはかつての道徳的誤りにもかかわらず正しいことをし、道徳的に進歩する。自己知と実践的推論という彼女の不完全な両徳のおかげで彼女は、じぶんに問題があることに気づき、(徳を発達させることと密接に関連した)理にかなった解決を考えだす——彼女は親切心だけでなく、人を助ける能力をも発達させる。彼女を発達に導くそれ以外の部分的諸徳には、考え深さが、そして、馴染みのある快適な社会的状況にいる人としかつきあっていないことについての適切な恥の感覚が含まれる。カイヤは、〈より完全に有徳であろうとするならじぶんがどのようになるべきか〉を推論する。そして彼女は、どうやってそのテロスにむかって進むべきかについて有効に推論する。その推論は大概の成人が手にいれることのできる単純な考え深さを要求するが、知的天才を要求しはしない。

あるアリストテレス的見解によれば、カイヤはより完全な徳という彼女のテロスにむかって前進する有徳な行為者である。「有徳な行為者」についてのこの説明はジョンソンの〈完全な徳〉の反論を克服する。なぜならこの目的論的説明は、すでに完全に発達したひとがするであろうことに限定されないからだ。目的論的説明はより完全に有徳な行為者へと発達することについてのものなのだけれども。だから、自己改善〔進歩〕に関するジョンソンの反論とは裏はらに、このアリストテレス的倫理観は、ジョンソンのいうように「“われわれはより善い人にならなければならない”という常識的な考えと不整合」では、ない。それどころか徳はわれわれを「今のありよう」から「あるべきありよう」につれてゆくために必須の特性なのだ。

ワルシュは、アリストテレス的徳倫理学についてのみずからのこのような理解を「目的論的」とよぶ。徳を、道徳的完成(あるいは、より大きな完成)というテロスへと向かうプロセスにおいて働くものとして押さえるからであろう。

ワルシュの議論は、“徳という理想的完成状態を措定する徳倫理学は、道徳的エリートのための倫理学だ”との誤解を適切にただすものと言えよう。